

掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その7 (ニューズレター No.69 2012.6.15 発行) 「有明海周辺の双子の地名達」 執筆者：大矢野栄次</p> 	<p>20年以上前に佐賀市内で開かれたシンポジウムの際に村岡屋総本舗の社長村岡安廣さんが「有明海を挟んで、同一地名がペアで多く存在する。それにはどういう意味があるかを考えるべきである」という趣旨の発言をされていた。</p> <p>村岡安廣社長がおっしゃるとおり、筑後川と有明海を基準にして、あるいは、挟んで肥前側と肥後側には、同一の地名がいくつか並んでいるのである。例えば、有田の黒髪山と熊本市内の黒髪山（竜田山）、武雄の御船山と熊本市の南の御船である。そして、佐賀神埼・三田川の吉野ヶ里と熊本県城南町の吉野山がある。また、大川市の榎津と熊本県の吉野山の西側にも榎津がある。変わった地名では、佐賀の天山が甘木の西の安にもあることである。</p> <p>最近、「古事記」も「日本書紀」も有明海と筑後川の周辺地域の歴史を物語風に説明したものであるという趣旨の研究を、私は趣味的に行っている。これらの同一の地名の分布は、日本の古代史が大きく関係しているはずであるというのが、私の最近の回答である。</p>
<p>その8(ニューズレター No.71 2012.12.14 発行) 「環濠集落」 執筆者：吉田洋一</p>  <p>「神埼の城館跡と環濠集落」神崎市 2008年より転載</p>	<p>佐賀平野の農村風景の特徴として、堀に囲まれた「環濠集落」があります。佐賀平野東部に位置する神崎市には、環濠集落・低平地城館跡の所在が確認されています。その時期は14世紀前半まで遡るといわれ、分布域は、現在の城原川西岸から中地江川間に密集しています。</p> <p>佐賀平野は、地質的に有明粘土層と蓮池層が堆積しており、同研究では「クリーク」の分布域北限と有明粘土分布北限がおおむね一致することが確認されています。このような湿地地形のなかで、同環濠集落は、14世紀に形成され始めた低平地城館や農村集落として位置づけられています。</p> <p>佐賀県および神埼市の調査により、姉川城跡をはじめ9カ所の城館跡、26カ所の環濠集落や遺跡が確認されています。また環濠集落、低平地城館には現在も「城」・「館」・「屋敷」といったシコ名が残っており、今後の調査研究が期待されます。</p>